

研究通信

No. 26

1968年6月刊

村落研究会事務局

登 録 市 町 村 町
愛知大学社会学
研 究 室 内

昨年の大会と本年の大会

(東京) 福 武 直

村研の昨年度の大会は、研究会論議によって以来、完全に独立して開くことができた最初の大会であった。それにもかかわらず、多数の参加者をもって盛会であったことは、開催の世話役の一端をになつたものにとつて大変うれしかった。とくに第二日の特別報告とそれとむとづく討論は、私もこもつたし、有益でもあつたと思う。こうした意気なをいつもつづけてゆきたいと願うのは、会員みんなの気持ちであらう。

しかし、そうであるだけに、何だか少し物足りない気分が残つたことも、おそらく多くの人にとって事実であつたと思われる。それは、やはり時間の制約では討論がとことんまでおし進められなかつたからである。もともと昨年度大会は、愛知県のとこかで泊りこみゆっくり懇談をかさねながら、討論しようという計画であつた。それが東京に変更されたわけであるが、東京でやるにしても、参加者全員の前泊が検討された。けれども、時期が連休にあつてあり、どうにも前泊の場所がえられなかつたのである。そのために、最初の計画で考えられたほどの時間がとれず、若干の物足りなさが感じられたのではないであらうか。

こうした経緯を経て、本年は、思いきって前泊を敷て試みたい

と尋ねる。その予定地は、愛知県の「農民の家」であるが、農民の憩いの場所を農民をめぐりながら歩くのもさわわしいであろう。東北大学の諸氏をお招きして、秋のせむしも流行することにした。西の方の会員には、少々お気の毒であるが、前泊費が安くつくわけだから、東京まで御足労願うのと大して遠いはずである。温泉につかりながら、報告会での議論を延長させて酒の花を咲かせ、お互に標になつて親交を深くするのも、非常によいことではないだろうか。これまで会を重ねながら、お互にゆっくり話しあえなかつたららみを、本年の大会では一挙にとりもどしたいと思うのである。